

『象院題語』の版本と冊板

竹越 孝

1. はじめに

筆者は先に、「朝鮮司訳院の漢学書『象院題語』について」(『汲古』第48号、以下拙稿)という小文を草して、朝鮮資料『象院題語』の版本・内容・成書年代をめぐる初歩的な検討を行った。これは本書に関する全般的な紹介を企図したもので、その言語に対する考察には別稿を予定している。この拙稿に対して、『汲古』の編集委員である尾崎康氏は当該号の「編集後記」の中で次のようなコメントを加えられた：

竹越氏の朝鮮刊本『象院題語』の紹介では、この本は朝鮮の赴京使の訳官のために明の地理や制度だけでなく、自国の事情をも白話で説明しているという。版本は康熙九年の活字本を同三八年に覆刻した本が唯一存するらしく、東洋文庫の二本は同版で、ともに尾題の「院」字を欠くが(前間本は「象」字も欠く、ともに補筆)、その末葉のうちの一字を幣原本が削っているのは修ということか。(146頁)

本稿は、以上の指摘を受けて拙稿の中で注意が至らなかった点を補正し、併せて『象院題語』の現存版本と冊板に関する若干の知見を加えようとするものである。

2. 現存の版本と冊板

『通文館志』巻八「什物」の記載によれば、本書は康熙庚戌年(1670)に鋳字で印行された後、己卯年(1699)に濟州の訳学生呉震昌がそれを覆刻したという。管見の限りでは、『象院題語』の現存する版本としては以下の五種が知られている。すべて不分巻一冊、全30張、有界、8行14字の木版本である：

A本：前間恭作氏旧蔵本(東洋文庫蔵、VII-1-39)

B本：幣原坦氏旧蔵本(東洋文庫蔵、VII-1-39 複)

C本：教誨庁旧蔵本(東京外国語大学附属図書館蔵、K-IV-59)

D本：奎章閣蔵本(ソウル大學校奎章閣蔵、奎 7493)

E本：奎章閣蔵本(ソウル大學校奎章閣蔵、奎 8600)

A・B・C本の概略については拙稿を参照されたい。なお、東京外国語大学附属図書館にはC本と同じく複数葉に「教誨廳」の印記を持ち末葉に「壬戌印置」と墨書される『重刊老乞大』、『重刊老乞大諺解』(ともにK-II-57)、『朴通事新釋諺解』(K-II-58)が所蔵されていること(同館のカードによればK-II-58の

蔵書番号を持つ『朴通事新釋』も所蔵されるようだが現物は確認できなかった）及びこの印記と墨書の状況は東京大学小倉文庫蔵の『伍倫全備記』（4510-1）、『伍倫全備諺解』（4508-9）においても同様であること（福井玲 2002 参照）を付言しておく。

奎章閣蔵のD・E両本については、このたび九州大学の船田善之氏よりマイクロフィルムを焼き付けた影照本のコピーをご提供いただき、異同を対照することが可能となった。ここに記して謝意を申し上げる。

拙稿で述べたように、この書物にとって貴重なことは、現存諸版本のもとになったと考えられる冊板（版木）が現存することである。鄭光・尹世英（1998：198-201）によれば、韓国の高麗大學校博物館には司訳院旧蔵にかかる本書の冊板9枚（D1068-1076）全18張分が現存するといひ、同書279-287頁には本冊板から新たに刷り出した版面の影印が附載されている。

3. 版本の二系統

拙稿では、国内蔵のA・B・C三本が冊大は異なるものの匡郭の大きさ・版式・版心・魚尾の形態がすべて同一であり、界線や字様も細部に至るまでよく一致すること、これが目録類から知り得るD・E二本の書誌記述とも概ね一致すること、及びA・B・C三本は鄭・尹（1998）における冊板の描写や刷り出された版面の影印とも基本的に一致していることなどから、現存の諸本はすべて同版であり、いずれもこの冊板から刷られたものであろうと推定した。ただし、冊板で尾題を「象 題語終」に作る点はB本とのみ一致するので、「B本は後刷本と考えられる」と述べた（45頁）。

しかしその後、現存の五版本は完全に同版というわけではなく、次の二系統に分けられることを知り得た：

甲本（原刊本）：A、C、D本

乙本（補修本）：B、E本及び現存冊板

この両系統の違いは、主に以下の三点に見出される（ は欠落を表す）：

	甲本	乙本
第29張裏2行14字	道	進
第30張裏2行1字	皇	
第30張裏8行（尾題）	象院題語終	象 題語終

上表の第一点は今回新たに気付いたもの、第二点は尾崎氏の御指摘により気付いたもの、第三点は拙稿の中で指摘したものである。なおこの他にも、乙本系統は全体的に版面の磨耗が進んでおり、特に第1張裏の第6-8行上部において

それが著しいことを挙げ得る。

この両系統を比較すると、乙本系統では第 29 張の版心から裏にかけての第 13 字目と 14 字目の間、及び第 30 張裏 2 行目以降の第 2 字目に切れ目が確認される。第 29 張裏では、第 14 字目の第 2 行を甲本が「道」、乙本が「進」に作るほか、同じく第 14 字目にある第 3 行「縣」、第 4 行「年」、第 5 行「荒」、第 6 行「等」、第 7 行「聞」、第 8 行「熟」の字体も甲乙両系統で相違している。また第 30 張裏では、第 1 字目の第 1 行「百」は両系統とも同じ字体であるものの、第 3 行「貢」と第 8 行「象」では異なり、かつ第 2 字目では第 2 行「帝」、第 3 行「了」に対して横に切れ目が入っている。さらに、乙本系統ではこれらに関わる部分の匡郭にも若干のずれが認められる。以上のことは鄭・尹（1998）に収められた版面の影印によって確認されるであろう（図版参照）。

両系統の差異は、冊板の欠損に対する補修を反映したものと思われる。乙本系統は、第 29 張の版心及び裏における下から 1 字分、第 30 張の裏 2 行目以降における上から 1-2 字分に相当する部分の冊板が欠けたために、新たに板を継ぎ足して補刻したのであろう。その際に「道」字を「進」字に誤り、「皇」・「院」両字を欠く結果になったと考えられる。鄭・尹（1998：160、170）によれば、第 29 張及び第 30 張は D1076 板の表裏に刻されているというから、第 29 張左側の下部・第 30 張左側の上部に相当する箇所板そのものが割れたのではないかと想像される。以上の推定が正しいとすれば、D1076 板の表裏には、第 29 張と第 30 張が上下は逆、左右はそのままの形で刻されていることになる。

上に引いた編集後記において、尾崎氏が「その末葉の一字を幣原本が削っているのは修ということか」とされるのは第 30 張裏の「皇」字に対してのことと思われ、その指摘は全く正しい。なお、氏はその前の文で「東洋文庫の二本は同版で、ともに尾題の「院」字を欠くが（前間本は「象」字も欠か、ともに補筆）」とされているが、筆者が見た限りでは、前間本つまり A 本に見られる補筆は既に刻された字を（おそらく不鮮明だったために）なぞって書いたものと考えられる。

4. 奎章閣蔵本について

この場を借りて、今回影照本を見ることができた奎章閣蔵の二版本について簡単に記しておきたい。『修正版奎章閣圖書韓國本綜合目録』集部隨筆類（下巻 1780 頁）における両本の記述は以下の如くである：

- ・象院題語 [編者未詳、刊年未詳] 1 冊 (30 張) 木 25×16.5cm 四周雙邊 半葉匡郭：25×16.5cm 有界 8 行 14 字 版心：上下花紋魚尾 版心書名：題語 < 奎 7493 >
- ・象院題語 [著者未詳、刊年未詳] 1 冊 (30 張) 木 (後刷) 33.4

×22.4cm 四周雙邊 半葉匡郭：19.4×13cm 有界 8行14字 版心：
上下花紋魚尾 印：[朴新秀印]等 <奎8600>

D本(奎7493)は甲本系統に属し、鄭・尹(1998:200)で言及される「giu 22734」のことであろうと思われる。同論では第4張右面(表)に8個の刻点があるとされているが、影照本によると第4張のみならず第1張から第12張までの17篇分にわたり句点が施されている。正確なことは実見の上でないと言えないが、「。」の形が同一なのですべて冊板に刻された句点と認めてよいものと思う(なお句点とは別に「、」を墨書した箇所も散見する)。また、末葉には「初授副奉事再除僉正」(30b5)という墨書があり、『奎章閣韓國圖書解題』によれば「副奉事」とは司訳院の正九品職であるから、本版本は副奉事に任命された者に与えられたものという。その他には、第1、2、4、5張などの不鮮明部分に補筆の跡が認められること、第7張表5行5字「了」に「一」を墨書し「子」に作ること、匡郭の上に全40篇の篇次を墨書すること、処々の難読字の右あるいは下にハングルで音注を墨書することなどを知り得る。鄭・尹両氏によれば冊板では句点の磨耗が激しいというから、冊板では本来全書にわたって句点が刻されていたものと思われ、D本が甲本系統の中では最も早い段階で刷られたと推定される。

E本(奎8600)は乙本系統に属する。刻点は冒頭の2張のみに確認され、墨書はない。上に引いた目録によれば「朴新秀」等の印があるというが、筆者が見た限りではその存在を確認できなかった。

5. おわりに

拙稿執筆時には、現存諸版本はすべて同版であるとの先入観が強くあったため、版本及び冊板に対する仔細な検討を怠り、結果として版本学上興味深い現象を見逃すに至ったことは慙愧に堪えない。貴重な御指摘を賜った尾崎氏と、貴重な資料を御恵投下くださった船田氏に対し、改めて深く謝意を表す次第である。

<参考文献>

- 奎章閣 1978 『奎章閣韓國圖書解題』, 保景文化社。
奎章閣 1994 『修正版奎章閣圖書韓國本綜合目録』, ソウル大學校奎章閣。
竹越孝 2005 「朝鮮司訳院の漢学書『象院題語』について」, 『汲古』48: 44-49。
鄭光・尹世英 1998 『司訳院譯學書冊板研究』, 人文社会科学叢書17, 高麗大學校出版部。
福井玲 2002 「小倉文庫目録 其一 新登録本」, 『朝鮮文化研究』9: 124-182。

天裏冰凍時禮部精膳司預先題了
窖冰的事情各衙門行手本錦衣衛
差了校尉的餘丁工部差了脚夫各
自準備器械到正陽門外頭打掃窖
冰揀了乾淨的冰兒伐下來窖了把
門鎖了打封把鑰匙來送了內官到
明年夏天裏頒冰時俟精膳司和管
冰的太監照例支應了

題語

二十九

災傷踏勘

災傷踏勘是天朝南北直隸十三進
夏稅秋糧兩遭地納稅各府州縣
裏差了委官屯田長和里長等每年
水旱霜雹虫損災傷等處仔細踏荒
熟報上司上司又報布政司巡撫等
衙門便本道布政司再踏荒熟奏聞
了若是委官每踏報以荒為熟以熟

為荒論罪充軍了

西北捷子

東北上有海西遼州毛麟衛捷子北
邊有朵顏衛富谷衛泰寧衛捷子也
有溫化衛捷子這都是打開元過遼
東赴京西邊有甘肅寧夏衛捷子打
喜峯口過蘄州赴京這箇捷子一年
一遭三百名進貢也有一年兩遭五
百名進貢這箇兩遭進貢的是天順
帝回駕時有箇功勞好以許他進
貢了

題語

三十一

象 題語終